

5. 清 熱 劑

熱証を治療する方剤である。

熱証には大きく分けて実熱と虚熱とがある。

実熱は、主に病邪が熱に変化した証である。邪熱が表にある時は発汗によって解し、裏熱が壮んになれば攻下する。しかし表で発汗しても熱が除かれない場合、あるいは裏熱が盛んになっても末だ結実していない時は、清熱瀉火の方剤を用いて直接その熱を清す。

虚熱は、陰虚による熱証で、脱水や栄養不良で、津液を消耗したため熱を発生するものである。

清熱剤の投与に当っては、熱の真仮を見きわめることが大切で、真熱仮寒の証には清熱剤を用いるべきであるが、真寒假熱の証には温裏回陽剤を投与しなくてはならない。

熱証があれば一般に舌質は紅、脈は数となる。

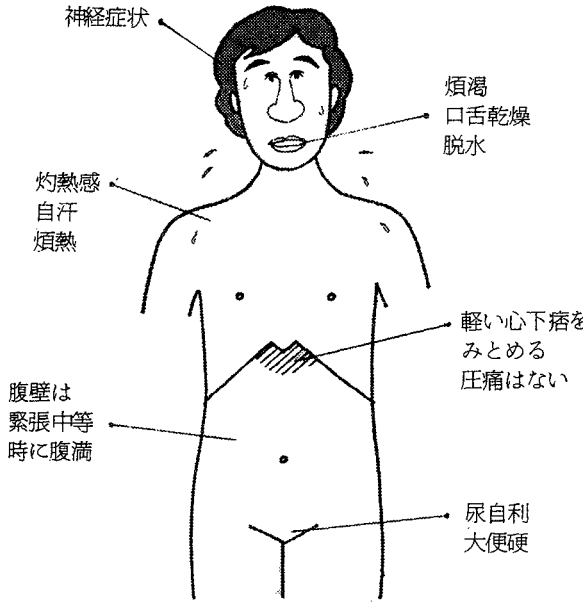
・清実熱

白虎加人参湯、竜胆瀉肝湯、三黄瀉心湯、黄連解毒湯、温清飲、荊芥連翹湯、柴胡清肝湯、桔梗湯、清肺湯、排膿散及湯、辛夷清肺湯、清上防風湯、十味敗毒湯、消風散、治頭瘡一方、乙字湯、立効散、茵蔯蒿湯、茵蔯五苓散、五淋散、猪苓湯。

・清虚熱

三物黄芩湯、清心蓮子飲。

びゃっ こ か にん じん とう
白 虎 加 人 参 湯 (傷寒・金匱)



方 意

白虎湯に人参一味を加えたものである。白虎湯証に似て、熱と渴が主症状であるが発汗が盛んで、津液が欠乏し、少しく寒気も覚える。煩渴し乾燥脱水の著しい者に用いる。病位は陽明経病、裏熱実証。脈は洪大。舌は乾燥、白苔か黄苔。

診断のポイント

- ・口渴、多汗、尿自利
- ・脈洪大
- ・皮膚灼熱感、脱水、軽い寒気

原 典

桂枝湯ヲ服シテ、大イニ汗出デテ後、大イニ煩渴シテ解サズ。脈洪ニシテ大ナル者ハ白虎加人参湯之ヲ主ル。(傷寒論・太陽病上篇)

傷寒、大熱無ク、口燥キ渴シ、心煩シ、背微カニ悪寒スル者ハ白虎加人参湯之ヲ主ル。(同・太陽病下篇)

傷寒脈浮、発熱シ、汗無ク其ノ表解セザルハ白虎湯ヲ与ウベカラズ。渴シテ水ヲ飲マント欲シ、表証無キ者ハ、白虎加人参湯之ヲ主ル。(同)

太陽ノ中熱ハ、渴是レ也。汗出デテ悪寒シ、身熱シテ渴ス。白虎加人参湯之ヲ主ル。(金匱要略・痙湿喝病篇)

処 方

セッコウ (石膏) …………… 15.0g	カンゾウ (甘草) …………… 2.0g
チモ (知母) …………… 5.0g	コウベイ (粳米) …………… 8.0g
ニンジン (人参) …………… 1.5g	